

アブヌワスはハルン・ラシッド王の時代にトルコのあるところに住んでいました。さて、ある日彼が王の庭園の外を通った時、彼は王が下に膝をついて屈み、大臣に背中に乗って木の上の方になっている果物を取るようになっているのを見ました。アブヌワスはそれを見て言いました。「よし。」彼は家へ帰りました。翌日、起きると彼は王のところへ行きました。「王と会いたいのですが。」王のところへ行くと彼に言いました。「私は私がバラマキを出ていき、二度とこのバラマキの民族にはなりたくない、ということをおあなたに証明してもらい、書面にて同意してほしいのです。私はもうバラマキにはいないということにサインをしてください。以上です。」「どうしてだ？」アブヌワスは言いました。「もうバラマキでいたくないのです。除いてください。」そこで、王は彼の決めたことだと思いました。「わかった。紙を持ってこい。」王は紙に書いてサインをし、アブヌワスは家に戻りました。しばらくしてから、王の背中に乗っていたあの同じ大臣が何かの間違いを犯してしまったのか、王がとても怒っていました。王は全てのバラマキを捕えて殺すようにと命じました。アブヌワスも捕らえられました。人々は、彼はバラマキの民族だと知っていたのです。王のところに着くとアブヌワスは言いました。「王、私はバラマキではありません。これが書面です。私はあなたに言ったと思います。尋問も受けません。」「いったいどうしてあのようなことを言ったのだ？」「私たちの国の王であるあなたは地面に膝をつき、この大臣にあなたの背中に果物を取るよう言いました。どうして、他の人を探して彼の背中に登らせないのでですか。だから、あなたは大臣を持ちあげすぎてしまい（上にのぼらせすぎてしまい）、その結果かれは落ちた（失脚した）のです。頭はもちあげられ、褒めに褒められ、最後には上まで登りつめてしまった。うぬぼれてしまったんです。そして、一度落ちて（落ちぶれて）しまうともう使いものにはならない。王はそれでアブヌワスがバラマキであることをやめにきたのかと納得しまいました。「わかったでしょう。これが、いつの日かとても悪いことにつながるのです。」